

捨てられ令嬢、二百年眠った吸血鬼伯爵の血の番として毎晩首筋を噛まれて溺愛されています

～古城の月光で墮とされる契約調教ハッピーエンド～

体験版

1

第1話

二百年眠っていた伯爵に、首を噛まれました／祖父の手紙、見つけました

霧が、深かった。

カンブリアの古城へと続く一本道は、両側を黒いもみの木に挟まれている。タクシーの運転手が「ここから先は車では入れない」と言ったのは、門の手前で道が狭まっていたからだ。リディア・ストラトン大きな旅行鞆を引きずりながら、半年前に亡くなった祖父の名前を刻んだ門扉を見上げた。

ストラトン城。

母方の祖父アルフレッドが遺言で孫娘に遺した、旧領地の古城。リディアは二十二歳で、ロンドン大学院・歴史学の修士課程二年目だった。

幼い頃に父を亡くした。日系移民の家系で、曾祖父の代にロンドンへ渡来した一族の末。母方が英国貴族ストラトン家の末裔で、リディアは法的に母方姓を継いでいる。父を亡くしてからは、祖父が引き取って育ててくれた。祖父っ子だった。半年前、その祖父が八十五歳で逝った。

同じ半年前、リディアは婚約を破棄していた。

相手は指導教授だった。四十五歳、既婚。学会の懇親会で「家庭は捨てない、君は愛人で構わない」と本性を見せられた。ばかなのは自分だ、と思った。学者として尊敬していた相手の

何を見ていたのか。学内で噂になり、研究室での居場所を失い、修士論文の進捗は半年止まったままだった。

遺産整理に一週間。それだけだ。

黒いかしの門扉が、内側からきしみながら開いた。

「お嬢様。お待ち申し上げておりました」

無表情の老執事が、深く腰を折った。白髪を後ろになでつけ、黒い燕尾服に銀の懐中時計の鎖が光っている。年の頃は五十代に見えたが、声に妙な重みがあった。

「執事のベルナルドと申します。アルフレッ

ド様より、お嬢様のお越しをかねてより伺っておりまして」

「リディア・ストラトンです。一週間、お世話になります」

学者の癖で、初対面の相手にも敬語がきれいに出てしまう。緊張すると左手の薬指の付け根をこするの、抜けない癖だ。

「まずは祖父の遺品の確認をしたいのですが」

「畏まりました。蔵書庫へご案内いたします」

ベルナルドの足音は、石の床にほとんど吸い込まれて消えた。

古城は思ったより広かった。広間の壁にはほ

こりをかぶった肖像画。階段の手すりには細い銀細工。地下へ続く階段の先で、古い書物のにおいが鼻に届いた。

地下の蔵書庫は壮観だった。天井まで届く本棚が四方を埋め、革表紙の古文書が並んでいる。リディアは思わず息をのんだ。歴史学者として、これだけの未公開資料を前にして冷静でいるのは難しかった。

「祖父は……これを、私に」

「アルフレッド様は、お嬢様こそが、この蔵書を継ぐべき方とおっしゃってりました」

ベルナルドの声は淡々としていた。

リディアは古文書に手を伸ばしかけて、ふと手を止めた。蔵書庫の奥に、もう一つの扉があった。重いかしの扉。鉄のかんぬき。扉の上に古い文字で何か刻まれている。

棺の間。

そう読めた。

「あちらは……」

「お嬢様。まだお見せするつもりはございませんでした」

ベルナルドは僅かに眉を寄せた。それは、長年仕えた者が示す微かな困惑だった。

「ですが、お嬢様の血が、扉を開けようとし

ておられる」

言葉の意味が分からなかった。けれど、足が勝手に動いた。

扉のかんぬきが、リディアの手のひらに触れた瞬間に、ひとりでに外れた。

冷気が頬をなでた。

石造りの広い部屋の中央に、黒い棺が一つ置かれていた。蓋には古い紋章。狼と月と血の滴。

その蓋が内側から、音もなく持ち上がった。

悲鳴は出なかった。喉が凍りついていた。

棺の中から、男が起き上がった。

銀の髪。後ろで一つに結われている。長いま

つげが伏せられ、ゆっくりと開かれた。瞳は灰色がかった青。古い氷のような色。白い肌、長身、細身。古貴族の黒い衣をまとっている。指には、銀の指輪。台座に、雪のような、淡い青い宝石が、嵌められていた。

男は棺の縁に腰かけたまま、リディアを見た。

視線が、合った。

逸らされなかった。

「……」

声が、出なかった。

「お久しぶりでございます、セヴラン様」

ベルナルドが棺の脇に進み出て、深く頭を下

げた。

「アルフレッド様の血を継ぐお嬢様が、本日、この古城をお相続なさいました」

男——セヴランと呼ばれた男は、ゆっくりとうなずいた。それから、リディアに視線を戻した。

「お嬢様。ご説明を申し上げます」

ベルナルドが、リディアの方へ向き直った。

「セヴラン様は二百年、お眠りでございました。マチルダ様の血筋の者が、この古城に到達した時のみ、短く目をお覚ましになります。アルフレッド様も、お若い頃に、棺の蓋越しにセ

ヴラン様と対話なさいました」

二百年。

言葉が、頭の中で滑った。

「この古城は、元々ノクトリオン伯爵様のもの
でございます。二百年前、マチルダ様が伯爵
様より城をお託しになり、ストラトン家として
表向きの管理を引き継がれました。地下の棺の
間は、今もノクトリオン伯爵様の領域でござい
ます」

リディアは、唇を噛んだ。情報が多すぎた。

「失礼ですが——」

声が、震えた。

「どなた、ですか」

セヴランが、薄く笑った。

その口元から、白い犬歯が覗いた。

「俺のはかない人。二百年、待ったよ♡」

リディアの背筋を、冷たいものが走り抜けた。

「私は——」

声が、自分のものでないように響いた。

「私は……契約の道具では、ありません」

セヴランが棺から降りた。足音が、しなかった。

「ふうん？ それで、はかない人は、何が言いたい？」

灰青の瞳が、近づいてくる。

「俺の番に、ご挨拶しとけよ？」

長い指が、リディアの顎に触れた。

ひやりとした。

「ベルナルド」

「畏まりました」

老執事は深く一礼して、扉の外へ静かに退いた。

二人だけが、棺の間に残された。

銀髪の男が、リディアの首筋に唇を近づけた。

「いい匂いだ。マチルダの血の、その先の血」

息が、首筋にかかる。

「やあ……っ ま、待ってくだ、しゃい……っ」

うろたえて舌がもつれた。敬語が、変なところで折れた。

ちゅう♡

最初の音は、首筋に唇が押し当てられた音だった。

ちゅう♡ちゅう♡ちゅう♡ちゅう♡

優しいキスが、続けて何度も降ってくる。

「やっ……あ、しえ、しえヴラン、しゃま……っ」

膝が力を失った。低い声が、耳の奥にじんと響いて、立っていられなかった。倒れる前に、男の腕が腰に回った。

「上手だ。声、出していいから」

(やだ、なに、これ……っ こんなもの、知らない……っ)

頭の奥が、ふわりと熱くなった。

黒い古貴族の衣の裾を引っ張られて、リディアは棺の脇の長椅子に押し倒された。古いビロードの長椅子。背もたれの装飾が、後頭部に当たった。

「ちゅう♡しょうか?」

ささやき声が、頭の上から降ってきた。

「な、なに、を……っ」

「ちゅう♡って音、好きな音だろ?」

答える間もなかった。

二本の長い牙が、ふっと、肌の上に、降りた。

ぷつ♡

首筋に、痛みが走った。

ぷつつ♡

二度目で、皮膚が弾けた感覚があった。鋭い熱。指先まで痺れた。——同じ、二本の点。重ねて、噛まれていた。

ちゅううう♡

男がリディアの首筋に唇を押し当てたまま、何かを吸っていた。血だ、と分かるのに、数拍かかった。

「じゅううつ♡じゅううつ♡」

吸う音が、次々重なった。リディアは喉の奥で声をのんだ。痛みではなかった。むしろ、痛みの代わりに、首筋から下腹までの一本の線が、火のついた糸のようにじりじりと熱くなっている感覚があった。

「あっ……あ、やっ……ああ……っ♡」

声が、勝手に漏れた。自分の声じゃないみたいだった。

「ふうん、いい血だな。マチルダの血より、甘い」

セヴランが、首筋から唇を離した。男の唇に

は、赤い血の珠が乗っていた。

ちゅう♡

その血ごと、リディアの唇に重ねられた。

「こく♡」

飲み下す音を、男が代わりに口にした。

（なに、これ、自分の血なのに……っ あった
かい……っ）

頭の中が、ぼんやりとした。

「次は、もっと深く飲ませてもらうけど？」

古いシャツのボタンが、男の指で外されていく。リディアは抵抗しようとして、手首をつかまれた。長椅子の背もたれの装飾の柱に、薄い

銀色の鎖が絡みついた。手首が二つ、その柱に縛りつけられた。

「し、鎖……っ 待って、ください……っ」

「待たない。もう、二百年、待ったから」

黒い古貴族の衣の前合わせが、ゆるりと開かれた。男の白い胸が見えた。

「俺の番に、ちゃんと挨拶しような？」

(やだ、やだ、これ、本当に、起きてること……っ
?)

長椅子の上で、リディアの細いシャツがめくり上げられた。下着の上から、男の唇が乳房の頂を覆った。

ちゅぱ♡ちゅぱ♡ちゅぱ♡ちゅう♡ちゅぱ♡

布越しの吸い付き。下着の薄い布地が、唾液で透けて、頂の色が浮き上がった。

「ふっ……う、やっ、やぁ……っ♡」

「ココ、もうとがってる。上手だな」

からかう声が、低い。

下着の紐が、引きちぎられるように外された。
直接男の舌が、頂を転がした。

ちゅぱ♡ちゅぱ♡れろ♡れろ♡ちゅう♡ちゅぱ♡

「あっ……あ、それ、らめ、れす……っ♡」

敬語が、もう保てなかった。母音と♡と、息の音だけが口から漏れていく。

「らめ？ 何が、らめ？」

「そ、そこ、なめ、らめ……っ」

「なめるのが、駄目？ なめない方が、いい？」

「ちが、ちが、ちがう……っ♡♡」

（ちがうって、何がちがうの？ 自分でも、もう分かんない……っ）

長いスカートが、めくられた。下着の上から、男の指が割れ目をなぞった。

くちゅ♡くちゅ♡くちゅ♡くちゅ♡

水音がした。自分の体から、水音がした。

「すごい、ぐっしょりだな。血、吸われただけで、こんなに？」

「ち、ちがっ、ちが……っ♡」

「ちがわないだろ？ ココ、もう疼いてるよな？」

くちゅぐちゅ♡くちゅぐちゅ♡くちゅぐちゅ♡

下着の上からの責めが、いきなり布を脱がされて、直接の指先になった。割れ目を上下になぞられて、リディアの腰が長椅子から浮いた。

「ひっ……あっ、やっ、やあ……っ♡」

「ぐちゅぐちゅ♡するぞ」

長い指が、ゆっくりと中に入ってきた。

ぐちゅっ♡ぐちゅっ♡ぐちゅっ♡

「あっ……あっ……あっ……ひあ……っ♡♡」

奥に指の腹が当たった。リディアの腰が、勝手に逃げた。けれど銀の鎖が、それを許さなかった。

(やだ、深い、深い、おく、までっ……♡)

「もう一回、首筋に、ちゅうう♡するぞ」

男が、覆いかぶさってきた。指を中に入れたまま、もう一度首筋に唇を寄せた。

ぷつつ♡

じゅうう♡じゅうう♡じゅうう♡

血を吸われながら、中をかき混ぜられて、リディアの視界が白く明滅した。

「あゝ ……♡♡ あ……♡♡ あ……♡♡」

自分の喉から、聞いたことのない声が出た。
濁った低い喘ぎ。

「いい声、出るようになった。お利口だな」

「し、しえヴラン、しゃま……っ もお……
ありましえん、もお……っ♡♡」

（なんで、こんなの、すぐ来ちゃう、来ちゃう……っ♡）

ぐちゅっ♡ぐちゅっ♡ぐちゅっ♡ぐちゅっ♡

指が、加速した。

「ふあっ、あ……あっ あ……っ♡♡」

「お、まだだ、まだ、待て」

指が抜かれた。リディアは、絶頂寸前を取り

上げられた快樂の落差に、首をのけぞらせた。

「やあっ……らめ、らめ、しえヴランしゃま、
らめれす……っ♡♡」

「ココで、出すのは、もったいないだろ？ ベッドに、行くぞ」

手首の銀の鎖が、ふわりと解かれた。男の腕が、リディアの体を抱き上げた。

長い廊下を、運ばれた。

大きな扉が、自然に開いた。

ベッドが見えた。天蓋付きの古い寝台。黒い毛織のカバー。

その上に、リディアは下ろされた。

銀の鎖が、もう一度手首に巻かれた。寝台の頭の柱に、固定された。

「俺の番に、ちゃんと、挨拶し直そうな？」

男の黒い古貴族の衣が、するりと床に落ちた。白い体。傷一つない胸。長い指。リディアは、自分の体が、その視線を恥じて熱くなるのを感じた。

「し、しえヴラン……しゃま……っ」

「うん。いい呼び方だ。続けて」

「ちが、ちが、待って、くだしい……っ」

「待たない」

ぐっ——と男の腰が、リディアの足の間に押

し付けられた。

ぬぷ♡

最初の感覚は押し当てられた、だった。熱くて硬くて、リディアの理解の外側にあるもの。

ぬぷっ♡ぬぷっ♡ぬぷっ♡

ゆっくりと、入ってきた。

痛みが走った。けれどすぐに、痛みは血の熱にのまれた。

「あゝっ……あ、ふっ……うっ……」

「ちゃんと、入った」

男の声が、低く優しかった。

(いた、い……痛い……でも、熱い……っ)

「動くぞ」

「ま、まって、まっへ、しえヴランしゃま、
まっへくdashya……っ♡♡」

だちゅんっ♡

最初の一突きでリディアの目の前に、白い火
花が散った。

だちゅんっ♡だちゅんっ♡だちゅんっ♡だちゅ
んっ♡

「ふあゝ っ……あつ あつ あつ あつ……♡♡」

「いい声だ。もっと、出して」

だちゅんっ♡だちゅんっ♡だちゅんっ♡だちゅ
んっ♡だちゅんっ♡

「し、しえヴラン、しゃま、らめ、らめ、らめれす、らめ、れすう……っ♡」

（らめ、ほんとに、らめ、これ、らめ……っおく、おく、おくがっ……♡）

奥に男の先端が、当たった。

その瞬間リディアの体が、勝手に跳ねた。手首の銀の鎖が、ちゃりっと鳴った。

「ココ、好きなんだな？」

ぱちゅっ♡ぱちゅっ♡ぱちゅっ♡

「らめ、しゃま、らめ……っ♡♡」

「らめ、じゃないだろ？ちゃんと、言葉で言ってみ？」

「いっ、いきましゅ……っ いきましゅ……っ
しえヴランしゃま、いきましゅ……っ♡♡」

ぱちゅっ♡ぱちゅっ♡ぱちゅっ♡ぱちゅっ♡ぱちゅっ

♡

「うん。よくできた。いきな」

ぐっ——と男の体重が、リディアの腰に押し
付けられた。

「ふあああ♡♡ いきましゅ……っ いきましゅうう……っ
♡♡」

(いく、いく、いっちゃう、しえヴランしゃ
まので、いっちゃう……っ♡♡)

ぷつつ♡

ピークの瞬間首筋に、もう一度牙が立った。

じゅううううっ♡

絶頂に吸血が重なった。リディアの視界が、
真っ白になった。

「あ……っ あ……っ ふあ……っ♡♡」

体の芯が、抜けた。

「うん。上手だったな♡」

男の声が、頭のどこか遠くで聞こえた。

褒められた、と思った。なんでその声で胸が
こんなに、と思った。

(なんで、うれしい、んだろ……っ こわい、
はずなのに……)

目蓋が、勝手に閉じた。

銀の鎖が解かれる音だけが、聞こえた。

＊ ＊ ＊

目を覚ましたのは、夜明け前だった。

リディアは寝台の上で一人だった。首筋に、
薄い噛み跡が残っている。下腹の奥に、まだ熱
が残っている。古貴族の衣の代わりに、白い寝
衣を着せられていた。

全部、夢だったなら。

立ち上がると、足が震えた。夢ではなかった。

寝衣のままで廊下に出た。ベルナルドの姿は
なかった。リディアは、地下の蔵書庫へ降りた。

理由は、説明できなかった。ただ、祖父の遺品の中に、何かがあるはずだ、という気がした。

革表紙の古文書の山の脇に、祖父の使っていた古い手箱があった。半年前、葬儀の後に弁護士から渡されたものと同じ意匠だ。けれど城に来てから初めて見るそれは、開いた状態で、机の上に置かれていた。誰かが、用意していたかのように。

中に、一通の手紙が入っていた。

封筒の表書きは、紛れもない祖父の筆跡だった。

——孫娘へ。

リディアは、立ったまま、震える指で封を開けた。薄い羊皮紙が一枚。祖父の几帳面な字が、並んでいた。

「孫娘よ、もしこの手紙を読んでいるなら、君はストラトン城を相続した。古城の真の主は、君を二百年待っていた。彼を信じなさい。彼は、君のことを命より大切にする。——アルフレッド」

指が、震えた。

手紙が、薄暗い蔵書庫の床に落ちた。

彼を、信じなさい。

その一行が何度も何度も、リディアの頭の中

で繰り返された。

体験版はここまで

これは、まだ入口です。

この先で、すべてが変わります。
選択も、関係も、そして――結果も。

知らないままで終わるか、
それとも、最後まで見届けるか。

答えは、本編にあります。

捨てられ令嬢、二百年眠った吸血鬼伯爵の血の番として毎晩
首筋を噛まれて溺愛されています